

教職課程学生を対象としたグループワークの実践報告

—いじめについて考えるためのグループワーク—

塩谷 隼平

要旨

2017年には学校におけるいじめの認知件数は41万件を超え、いじめ問題は学校教育において大きな問題となっている。本稿では、いじめ問題について学ぶためのグループワークであるエクササイズ「いじめの反対語」を紹介し、教職課程学生への実践について報告した。エクササイズ「いじめの反対語」は、まず個人でいじめの反対語を考え、次にグループで話し合うことを通して、いじめについての様々な考え方に触れ、いじめの本質について理解し、その逆の人間関係について考えることを目的としている。また、その話し合いの過程で、お互いの意見を尊重することで、いじめとは反対の人間関係を体験することも期待できる。教職課程の学生に実施した際も、個性豊かな反対語があがり、グループでの話し合いを通して、お互いの価値観の違いに触れ、いじめという問題について多角的に考えられたことが示唆された。さらに大学生の教育のみならず、いじめ問題の予防教育としても活用できると考えられる。

I 学校におけるいじめの問題

1. いじめの認知件数

文部科学省（2018）の報告によると、2017年度の学校におけるいじめの認知件数は414,378件（小学校317,121件、中学校80,424件、高等学校14,789件、特別支援学校2,044件）であった。図1に2000年以降のいじめの認知（発生）件数の推移を示したが、2000年の30,918件と比較すると10倍以上になっており、現在の学校教育においていじめが大きな問題となっていることがうかがえる。

また、認知した学校の割合をみると、全国の74.4%（小学校78.4%、中学校80.6%、高等学校56.6%、特別支援学校36.1%）の学校でいじめが発生しており、教員として働くうえで、いじめは避けることのできない問題となっている。

いじめの認知件数の激増をみて、現在の子どもたちの間でいじめが増加していると考えすることは早急すぎる。いじめの問題は昔からあり、暴力の側面からみれば、以前のいじめのほうが激しかった。いじめの認知件数の増加は、いじめの発生件数の増加ではなく、いじめ問題に対する意識が高まり、今まで認知されていなかったいじめが顕在化したことに

よる増加と考えるのが妥当である。実際、文部科学省の調査も2005年まではいじめの「発生件数」としていたが、2006年からは「認知件数」に変更されている。

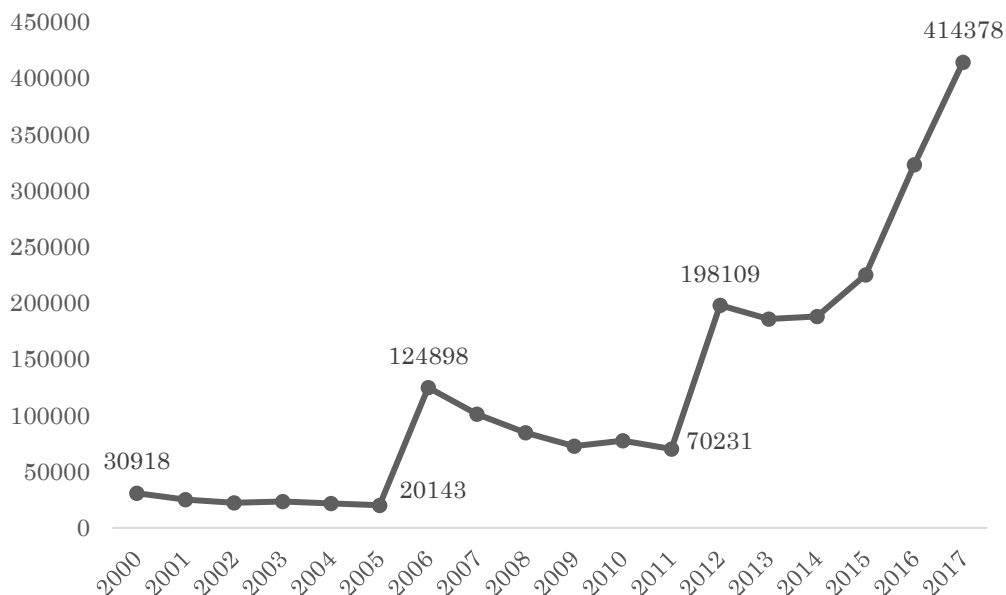


図1 いじめの認知（発生）件数の推移（2000～2017年）

2. いじめの定義

そうすると何をもちいていじめと定義するかによって、いじめの認知件数は大きく変わる。文部科学省のホームページによると、1986年に当時の文部省は、いじめの定義を「①自分より弱い者に対して一方的に、②身体的・心理的な攻撃を継続的に加え、③相手が深刻な苦痛を感じているものであって、学校としてその事実を確認しているもの」とした。その後、1994年には「①自分よりも弱いものに対して一方的に、②身体的・心理的な攻撃を継続的に加え、③相手が深刻な苦痛を抱えているもの。なお、起こった場所は学校の内外を問わない。」に変更された。

さらに、2006年に文部科学省は「一定の人間関係のあるものから心理的、物理的な攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの。なお、起こった場所は学校の内外を問わない。」にいじめの定義を変えた。それまでの定義にあった「自分よりも弱いものに対して一方的に」という部分が「一定の人間関係のあるものから」に修正された。これは、子どもたちの力関係が大人からみえる表面的なものと実際は大きく異なることや、何

かのきっかけでいじめの加害者と被害者が容易にいれかわってしまうことが関係している。また、「継続的な」という文言も削除された。その影響もあり、それまで2~3万件ぐらいで推移してきたいじめの発生件数が、2006年には124,898件に急激に増えた。

2011年に大津市で中学2年生がいじめを苦に自殺をする事件がおきたことなどをきっかけとして、2013年にいじめ防止対策推進法が制定された。その施行を受けるかたちで、文部科学省は2013年にいじめの定義を「児童生徒に対して、当該児童が在籍する学校に在籍している等当該児童生徒と一定の人的関係のある他の児童生徒が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものも含む。）であって、当該行為の対象となった児童生徒が心身に苦痛を感じているもの。なお、起こった場所は学校の内外を問わない。」と定め、現在に至っている。それまでの「攻撃」という言葉が「影響」という言葉に変わっており、加害者側の意図ではなく、被害者側が「心身に苦痛を感じている」かが大きな判断基準となった。また、「インターネットを通じて行われるものも含む」と明記された。その背景には、多くの子どもがスマートフォンなどを通じてインターネットにアクセスするようになり、身体的な暴力や暴言だけでなく、メールやSNS上にもいじめが広がっていることがある。いじめの定義の幅が広がるにつれて、いじめの認知件数も2012年に198,109件と20万件に迫る勢いで増え、その後も増加し続けている。

3. いじめ問題の対応

粕谷（2017）は、いじめ問題の対応を、未然防止のための予防開発的介入であるプリベンション、今まさに起きている事案への介入であるインターベンション、事後の介入となるポストベンションの3つに分け、プリベンションのための教育実践が必要であると述べている。いじめ問題は、被害者の自殺という最悪の結末をあげるまでもなく、被害者に身体的、心理的に大きな悪影響を与える。さらに、いじめの加害に直接加担していなくても、傍観者としていじめに接した子どもにも大きな心の傷となり、さらに、いじめの加害者のその後の人生に与える影響も大きい。そのため、いじめ問題における支援は、いじめが起きてから対応するのでは遅く、未然に予防することが理想である。しかし、現在の文部科学省のいじめの定義にある「児童生徒が心身に苦痛を感じている」ことを判断基準とすると、学校における人間関係のなかで、心身に苦痛を全く感じずに過ごすことは不可能であり、いじめ問題をゼロにすることは不可能であろう。また、いじめをゼロにしようとすることで、意識的にも無意識的にもいじめが認知されなくなり、ますます深刻化してしまう恐れもある。

そう考えると、いじめ問題における対応としては、プリベンションを基本としながら、いじめの早期発見と深刻化の予防が大切になる。そして、そのためには学校教育においていじめの予防となるような心理教育の取り組みが有効である。

Ⅱ エクササイズ「いじめの反対語」

1. いじめ問題のための心理教育

いじめ問題について子どもたちを指導するためには、いじめをしてはいけないと伝えるだけでは不十分であり、子どもたちが人間関係をどのようにもつべきかを伝える必要がある。エクササイズ「いじめの反対語」は、筆者がいじめ問題を考えるために作成したグループワークである（吉武・鈴木・塩谷、2010）。このワークの特徴は、「いじめ」という言葉の反対語を考えることで、いじめの反対の状態、つまり、いじめとは逆の人間関係について話し合うことである。もともとはスクールカウンセリングを学ぶ大学生のために作成したワークであるが、学校におけるいじめ問題のプリベンションとしての教育にも応用できる。

2. エクササイズ「いじめの反対語」の実施方法

対象年齢は小学生の高学年以上で、人数は教室に入りきれば何名でも実施可能である。4～5人のグループで話し合いを行うので、その人数で囲んで座ることのできる机とイスが必要である。メンバーには筆記用具のみ準備してもらう。

まず、「いじめの問題についてみんなで考えよう」などと授業の目標（ねらい）を板書などで呈示して、A4サイズのワークシート（図2）を1人1枚配布する。そして、「課題」を説明して、「いじめの定義」と「いじめの反対語」とその理由を考えてもらう。時間は10分程度あれば十分だが、作業の様子をみて必要があれば延長する。この作業で最も重視することは、自由な発想を促すことである。いじめの定義や反対語に正解はなく、インターネットなどで調べることや他者と相談することは禁止し、よいか悪いかは気にせず自分なりに考えるようにさせる。反対語の回答は複数でもよいことや、単語ではなく文章になってもかまわないこと、新しい造語でもよいことも伝える。また、あまり考えずにいじめの反対語に「仲よし」と書いているメンバーがいた場合、「あなたはいじめという関係にない人とはみんな仲よしかな？」などと質問をして、さらなる熟考を促してもよい。

次に、4～5人のグループに分かれて話し合いを行う。その際に、発表用と話し合い中のメモのためにA3サイズくらいの白紙2～3枚とカラーペンのセットを各グループに配布する。まず、メンバーが順番に、自分の考えた「いじめの定義」、「いじめの反対語」とその理由を発表する。そして、自由に話し合いをして、グループの「いじめの定義」と「いじめの反対語」を決定する。最後に決定した「反対語」をA3サイズの紙に書く。グループでの話し合いで大切なことは、よい「反対語」を考えることではなく、お互いの意見を尊重しながら、いろいろな考え方に触れることである。大学生などの場合、反対語を決めることよりも、それぞれのいじめに関する体験などの話に多くの時間が費やされることもあ

るが、いじめをテーマにした話し合いが行われていれば、特に介入する必要はない。グループでの話し合いの時間は30分ほどがよいだろう。

複数のグループで実施した場合は、グループごとに考案した「いじめの反対語」を発表していく。書いてもらったA3用紙を黒板などに掲示してもよい。

その後、ふりかえり用紙(図3)を配布して、10分ほどで記入してもらい、10分くらいつかって書いた内容をグループ内でシェアリングする。

最後に、図4のような資料を配布して、いじめ問題についての小講義を10分ほど行う。このときに「このエクササイズではいろいろな発想を大切にすることが重要」であること、「正解となるようなよい反対語を見つけるのではなく、お互いの価値観の違いにふれることが目的」であること、「自分たちとは違った価値観を認めずに異なる価値観をもった人を排除しようとする心理がいじめの原因の一つ」であること、「エクササイズを通して自分とは異なる考えを見聞きし、お互いの価値観の違いを認め合って尊重する雰囲気を経験することが、いじめとは反対の体験をする機会になる」ことなどを伝えるとよい。

3. エクササイズ「いじめの反対語」の留意点など

筆者は大学生を対象に何度もこのエクササイズを実施しているが、毎回、多様な反対語があがり、その自由な発想力に驚かされる。学生たちも、それぞれが想像した以上にいろいろな言葉が反対語としてあがり、お互いの意見から刺激をもらうことができる。また、いじめという身近な問題を扱ったワークのため、グループでの話し合いも盛り上がることが多い。

大学生のように、いじめの問題から少し距離があるメンバーを対象に実施する場合は大きな問題はないが、中学生や高校生など、今まさにいじめ問題の渦中にある生徒がメンバーにいるときは、グループワークの実施に慎重になったほうがよいであろう。エクササイズ「いじめの反対語」は、プリベンションには有効であると考えられるが、すでに起きているいじめ問題を解決する力はない。あくまで予防的な教育として活用すべきである。

エクササイズ
「いじめの反対語」

課題

- ・ 「いじめ」の反対語はなんでしょう？
- ・ 反対語とは、意味の上で互いに反対の関係にある語で、例えば「上」の反対語は「下」、「積極」の反対語は「消極」になります。
- ・ そうすると「いじめ」という状態をどのように定義するかで、「いじめ」の反対語も異なると思います。
- ・ このエクササイズでは、「いじめ」というのがどのような状態なのかを自分なりに決めて、「いじめ」の反対語、つまり、いじめとは反対の関係にある状態を考えてみてください。
- ・ これが正解というものはありません。一般的な常識や知識にとらわれず、自由な発想を大切にしてください。いくつか思いつく人は複数書いてください。反対語は単語である必要はありません。

①あなたは「いじめ」とは、どのような状態だと考えますか？ 自分なりのいじめの定義を考えてください。

②あなたの考える「いじめ」の反対語は？ またその理由も書いてください。

図2 「いじめの反対語」のワークシート（実際はA4サイズ）

<ふりかえり>

名前 _____

I. 「いじめの反対語」を考えて、感じたことや気づいたことは？

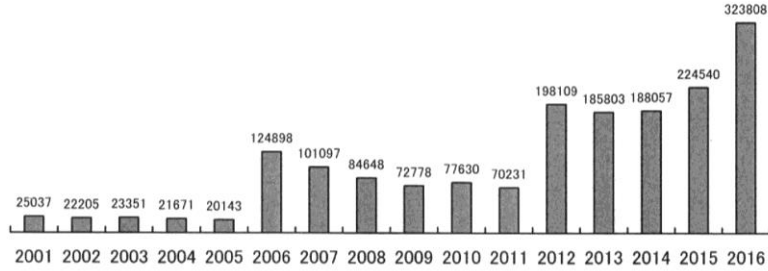
II. ほかのメンバーの意見を聞いて、またお互いに話し合っ感じたことや気づいたことは？

III. その他に思ったことや感じたことがあれば、自由に書いてください。

図3 ふりかえり用紙（実際はA4サイズ）

小講義「いじめの反対語」

1. いじめの認知件数



小中高等学校におけるいじめの認知（発生）件数の推移

2. 文部科学省のいじめの定義

- ・ 1994（H6）年～
「①自分よりも弱いものに対して一方的に、②身体的・心理的な攻撃を継続的に加え、③相手が深刻な苦痛を抱えているもの」
- ・ 2006（H18）年～
「一定の人間関係のあるものから心理的、物理的な攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの」
- ・ 2013年（H25）年～
「児童生徒に対して、当該児童が在籍する学校に在籍している等当該児童生徒と一定の人的関係のある他の児童生徒が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものも含む。）であって、当該行為の対象となった児童生徒が心身に苦痛を感じているもの」
- ・ 2011年に大津市で中学2年生がいじめを苦に自殺をする事件がおき、2012年に国会でいじめ防止対策推進法が国会で可決される

3. お互いの価値観の尊重

- ・ いろいろな発想を大切にすることがこのエクササイズでは重要
- ・ 正解となるような良い反対語を見つけるのではなく、お互いの価値観の違いにふれることが目的
- ・ 自分たちとは違った価値観を認めずに異なる価値観をもった人を排除しようとする心理がいじめの原因の1つ
- ・ エクササイズを通して自分とは異なる考えを見聞きし、お互いの価値観の違いを認め合って尊重する雰囲気を経験することが、いじめとは反対の体験をする機会になる

吉武光世・鈴木義也・塩谷隼平 2010 ころを見つめるワークブック 培風館

図4 小講義の配布資料の例（実際はA4サイズ）

Ⅲ エクササイズ「いじめの反対語」の実践報告

1. 「教育相談の基礎」での実践

筆者は、大学で教職課程の科目である「教育相談の基礎」を担当している。この講義では、教育相談に必要な援助スキルや臨床心理学の知識について、グループワークを用いて体験的に学ぶことを中心にしており、いじめ問題をテーマにした授業では、「いじめの反対語」を実施している。今回は、ある年の実際の授業の様子を伝えながら、エクササイズの内容について報告する。

2. 授業の様子

この日の授業の参加者は大学3～4年生の8名（男性6名、女性2名）であった。授業時間は90分で、机と椅子の移動できる教室を使用している。最初に授業の目的を伝え、課題シートを配布して、いじめの定義といじめの反対語とその理由を個人で考えさせた。その際、考えるきっかけになるように、『いじめられている君へ いじめている君へ』（朝日新聞社、2007）という冊子から、著名人がいじめ問題について書いたエッセイをいくつか選んでコピーして配布した。個人作業は15分ほどであった。

次に、4人ずつの2つのグループに分けて、それぞれが考えたいじめの定義と反対語を発表した。8名の考えたいじめの反対語は「おもいやり」「相互理解」「奉仕」「守る」「ほめちぎる」「キラキラ」「平常（通常）」「理解、受容」であった。筆者としては8名全員が異なる反対語を考えた時点で、このワークは半分成功したような気分になった。

その後、30分ほどグループで話し合っただけでグループで決定し、配布したA3用紙にカラーペンで書いて発表した。それぞれのグループから、「調和」と「おもいやりをもち、相互理解して、ほめちぎり、平常を保つ」という反対語が発表された。後者の反対語は、4名のメンバーが個人で考えた反対語をつなげた文章となっていた。

ふりかえり用紙を配布し記入してもらい、グループ内でシェアリングを実施した。学生からは、「思ったよりもいろいろな言葉が出てきて驚いた」、「いじめのどの部分に注目するかで反対語がかわった」、「あらためて、いじめは難しい問題だと思った」などの感想があがり、お互いの価値観の違いを知ることや、いじめ問題について多角的に考える体験ができたことと推測された。

最後に、小講義のプリントを配布して、いじめ問題について簡単に講義をして終了となった。

IV まとめ

多くの学生は、今までの学校生活の中で、いじめという問題に何らかの形で関わった経験をもっており、大学生にとってもいじめは非常に身近な問題であるといえる。しかし、身近すぎる問題のため客観的にみることができなくなってしまう。また、「いじめはダメ」「いじめはしてはいけない」というのは多くの人にとって共通の認識であるが、「じゃあ、どうすればよいか」を子どもたちにきちんと説明できる人は多くないかもしれない。

エクササイズ「いじめの反対語」は、いじめの反対語を考えることを通して、いじめ問題の本質を客観的に分析し、いじめとは反対にある人間関係に思いをはせることを目的としている。教職課程の授業で実施すれば、これから学校教育に携わる可能性のある大学生が、いじめ問題についてアクティブに学ぶことができる。また、学生たちが実際に子どもの教育に関わるようになったときは、いじめ問題の予防教育として活用することも期待できる。

これから日本の教育現場では、価値観がますます多様化していくと考えられる。エクササイズ「いじめの反対語」の体験が、お互いの価値観の違いを尊重し、その違いを受け入れ、違いから多くのことを学ぶような人間関係の構築といじめ問題の解決に少しでも役立てばと思う。

文献

朝日新聞社 (2007) 『いじめられている君へ いじめている君へ』 朝日新聞社

粕谷貴志 (2017) 『いじめの定義の理解と求められる教育実践』奈良教育大学教職大学院研究紀要 (9) pp109-114

文部科学省初等中等教育局児童生徒課 (2018) 『平成 29 年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について』

吉武光世・鈴木義也・塩谷隼平 (2010) 『ここを見つめるワークブック カウンセリングを知り、コミュニケーション力を磨く』 培風館